

平成22年度 大宮開成中学校 第1回 入学試験問題

国 語

座席番号	
受験番号	
氏 名	

受験上の注意

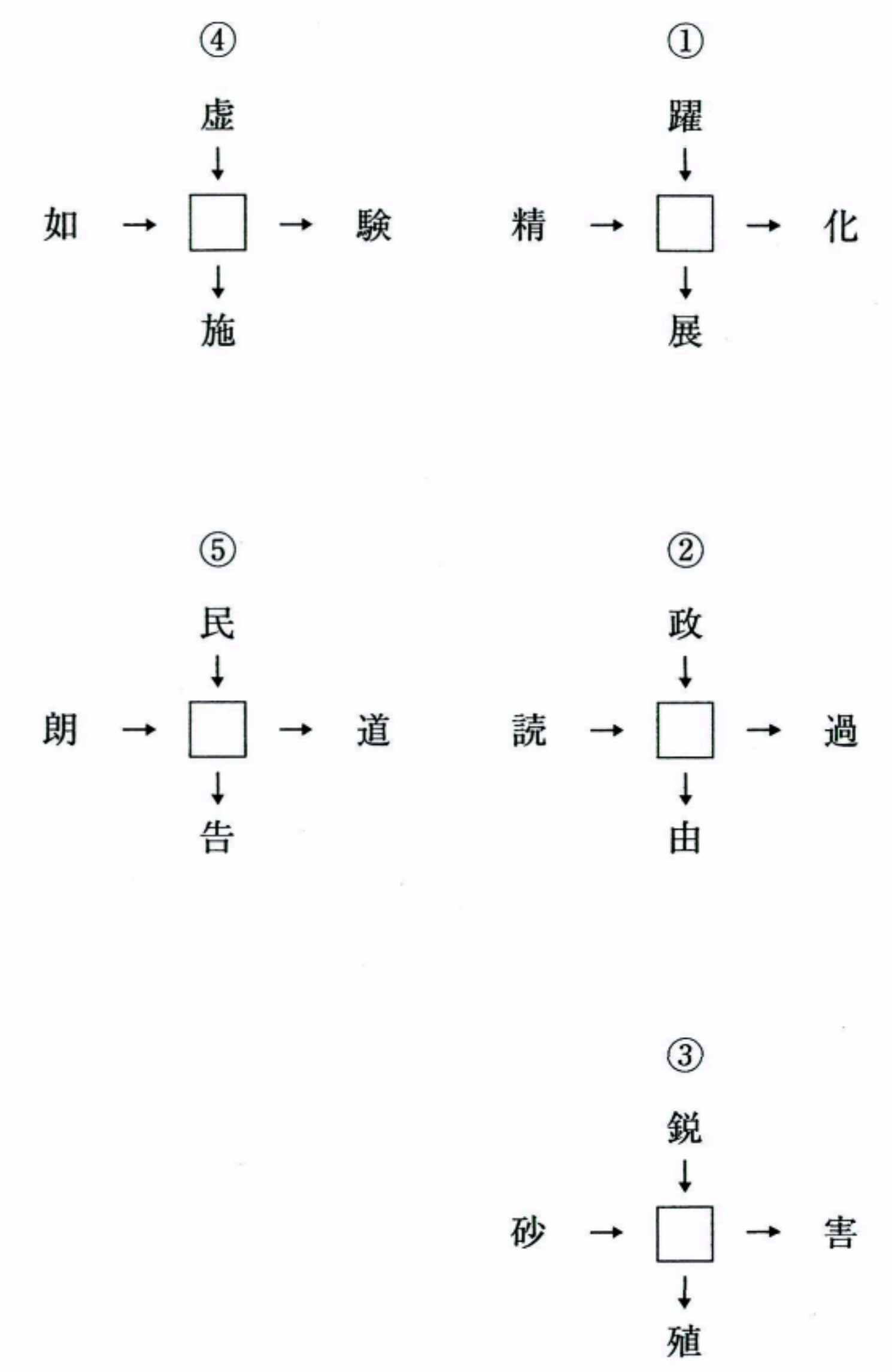
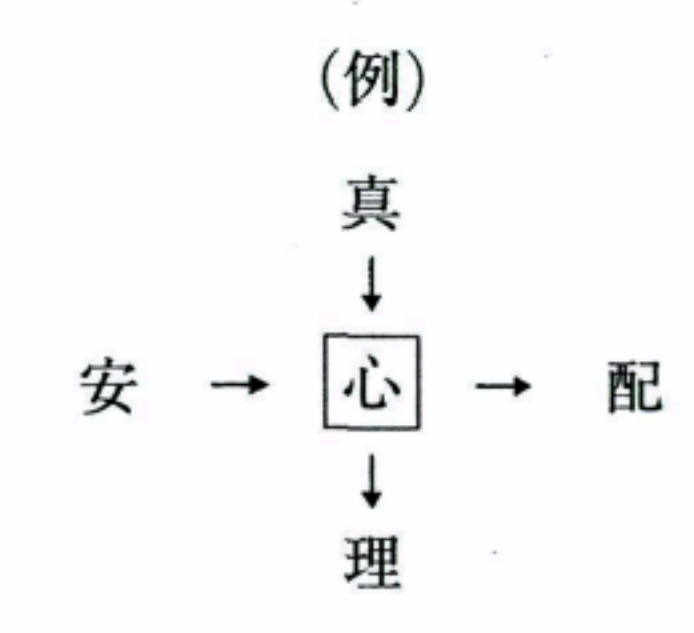
1. 試験時間は、50分間です。
2. 答えを書き始める前に、問題用紙に座席番号・受験番号・氏名を、解答用紙に座席番号・受験番号・氏名を書いてください。
3. 字数制限のある問いでは、句読点や符号（ 、 。 「 」 など）も一字と数えます。
4. もし、読みにくいところがあったら、静かに手を上げて、試験監督の先生に聞いてください。
5. もし、解答用紙が破れたときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
6. もし、気分が悪くなったときは、静かに手を上げて、試験監督の先生に知らせてください。
7. 問題を解き終わっても、途中退室はできません。

一、次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 昼間が最も長いゲシの日が近い。
- ② 宣伝がキいて売れ行きがいい。
- ③ ジミな服を着る。
- ④ 猫がねずみをトる。
- ⑤ クナイ庁に勤める。

問二 次の□に漢字を入れると四つの熟語ができます。例にならってその漢字を答えなさい。ただし、熟語は矢印の方向に読みます。



問三 次の各文中の——線部のことは、どの部分にかかっていますか。例にならって、それぞれ一文節で書きぬいて答えなさい。句読点はふくみません。

(例) 太郎は小さな声で返事をした。(答：声で)

- ① 大人たちは勝手に赤信号を渡ったが、少年はじつと我慢して青信号になるまで待った。
- ② 梅雨の時期、家の紫陽花はひっそり庭の片隅で雨にぬれていた。
- ③ 久しぶりに会った祖父に向かって、少年は来年またきつと必ず会いに来ると約束した。
- ④ 母はときどき心配そうにちらつと子供の動きを横目で見た。
- ⑤ 彼女はいくら「一緒に学校行こうよ。」という手紙を出しても、返事がもらえなかった。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もともと日本建築は、屋根にそのデザインの粋をこらしたものだ。切妻、入母屋、寄棟などのさまざまな屋根の形、千木、堅魚木、鬼がわら、卯建などの多くの屋根の装飾品の存在は、そのことをたんにしめしている。いなかへゆくと、屋根がすっぱり軒ふかくまでかぶっていて、とおくから見ると、家全体が屋根だけでもあるかのような、わらぶきやかやぶきの農家をみかけるが、なかなか風情があつていいものだ。建築のシェクター（おおい）機能をさして、「日本建築は屋根、西洋建築は壁」とかんがえられてもよさそうな光景を、それはしめしている。そういう日本建築の屋根が、「近代化」のかけごとともに、だんだん少なくなっていくのは、さびしいことである。

ところが、近代化＝洋風化とかんがえられるその本家のヨーロッパへいつてみると、新しいアパートなどにも、いぜんとして屋根のついているケースが多い。北欧やイギリスのニュー・タウンなどでは、とくにそれが目だつ。その理由は、きわめて簡単明瞭である。というのは、建物の最上階に屋根があると、階下のへやの保温になり、屋根裏を物置などに利用することができ、そしてなによりも大切なことは、雨もりのしないことである。かんがえてみれば、フラット（水平）の屋根よりは、傾斜のついた屋根のほうが、水はけがよいにきまつている。屋根が破損したときも、かわら屋根だと部分的補修ですむ。ところが、アスファルトの上に軽量コンクリートをうちこんだフラット・ルーフでは、そうはいかない。いったん雨がもるとなると、コンクリートをみなはがさなければならず、これはたいへんなことだ。

住宅公団が発足した当初、アパートの屋上からの雨もりがあいついだ。そして、いまなお公団住宅は、雨もりに悩まされることから解放されていない。私の友人が勤めている建設省建築研究所は、三階だての鉄筋コンクリートづくりであるが、その三階は、年中、屋上からの雨もりにこまっているそうである。なにしろ建築の専門家たちばかりがいるところだから、いろいろやってみるのだが、いっこうに雨もりは解消しない。けっきょく、建物が老朽化したためだからしかたがない、ということになっていくらしい。鉄筋コンクリートづくりが、三〇年そこで老朽化するのも問題であるが、これはひよつとしたら、建築の考えかたに、なにか根本的なまちがいがあるのではないだろうか、とかんがえこまざるをえない。原理的には、プールの壁や床などを施工するのと同様に、アスファルトの防水工法を屋上にもつかっているのであるから、フラット・ルーフでも雨もりがおきないはずだけれど、かんがえてみると、屋上は建物でもいちばん風化されやすいところである。長年月のあいだには、いろいろと故障もおきてくる、ということを経験にいかねばならないのではないか。

そうやって世界をみわたしてみると、フラット・ルーフの多いのは、地中海沿岸やアフリカなど、雨の少ない乾燥地帯ばかりである、ということに気がつく。雨の多いイギリスや、雪のつもる北欧では、建物のほとんどが屋根つきだ。ところが、日本は、雨の多いモンスーン地帯に属している。雨の対策は、むかしからこの国の家屋の構造にとって、重要な課題であったはずだ。それなのに、どうして「近代化」とともに、建物から屋根が除却されてゆくのであろうか。雨ばかりではない。冷房完備がのぞめるわけでもない庶民のアパートの最上階では、屋根のないフラット・ルーフのために、人びとは、^{※ふくしやちゅう}屋上からの放射熱をうけて、むしあつい夏の夜を、苦痛にたえてすごさなければならない。

そうまでしても、建築家がモダン・ビルディングから屋根をとりさる理由のひとつは、建物の「近代化」^⑤美観である。では「近代化」とは、いったいどういうことなのか。

人工石をつくる、ということは、ヨーロッパ人の永年の夢であったが、一九世紀に、フランス人のモニエやアンペリックらが、石とセメントをまぜたコンクリートを発明し、これに鉄筋を補強した鉄筋コンクリート構造を登場させるにおよんで、建築のつくりかたに一大革命がおこった。それまでは、世界各地のそれぞれのところで産出する土着的な建築材料——石、れんが、木などをつかって苦心して建物建てていたが、鉄筋コンクリート構造が発明されるようになると、人はいとたやすく軽快で強じんな建物をつくるのが可能になる。さらにコンクリート構造は、ちょうど鉄を鋳型にながしこんで鋳物をつくるように、どんな形にでも自由自在にできる、という特性をもっている。材料を極力節約した経済的な構造の追求がおこなわれた結果、ここにマッチ箱のような単純な幾何学的構成の建物ができあがった。そして、その材料——鉄、砂、セメントなどは、比較的どの国でも、容易に手にいれることのできる普遍的なものであるから、経済性に代わって普遍性をもったこのような建物のスタイルを、人びとは、^⑦インターナショナル・スタイルとよんだ。こうなると、いままでの装飾性をもった建物は古くさいもののように感じられ、構造の経済性に忠実な幾何学的造形こそが近代のスタイルである、と人びとはおもいこむようになったのである。

とはいうものの、高層のビル建築には、たしかに「マッチ箱スタイル」のものもあらわれてはきたが、住宅となると、かならずしもそうはいかない。人びとはなお、屋根のある伝統的なスタイルをこのんだ。水平屋根をもつ「マッチ箱スタイル」が住宅にもあらわれたのは、第一次大戦後のドイツの深刻な住宅問題のなかで考案された「最小限住宅」や「規格住宅」の実験にはじまる。その様式が、第二次大戦後

には、発展いちじるしいアメリカの中西部に数多く建てられた中・上流の「モダン・リビング」にうけつがれ、新しい時代の生活様式——アメリカン・スタイルとなって、グラフ雑誌などにより全世界に紹介されたのである。新しいもののすきな日本人が、さっそくこれにとびついたことはいうまでもない。

しかし、乾燥したヨーロッパ大陸中部や、アメリカ中西部の住宅などで発達したそれが、はたして、^{しつじょう}湿潤な地帯でも、「近代化」で、かつ「美的」なものであろうか。日本とよく似た気候をもつイギリスでは、いまなお住宅に屋根のあることは、絶対的な条件のようにかんがえられているし、また、北欧には、屋根のある美しいアパートがいっぱいある。アメリカでも最近では、個人住宅はいうにおよばず、アパートにも傾斜屋根をのせたスタイルのものが、建築家の新しい作品として、つぎつぎに発表されているようだ。そういうのをみていると、「マッチ箱スタイル」をもって近代的美観とするのは、^⑧世界の一面をしかみない、皮相的なものにすぎないのではないか、とおもわれる。

(上田篤『日本人とすまい』による 問題作成のために本文を一部変更・省略したところがあります。)

※ 放射熱…放射熱に同じ。物体に吸収されて、その物体の温度を上げるのに使われる放射エネルギー。

問一——線部①「それ」の指し示す内容として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 建築のシェルター(おおい)機能
- イ わらぶきやかやぶきの農家
- ウ 日本の建築は、屋根にデザインの粋をこらしていたこと
- エ 日本建築から屋根がだんだん少なくなっていること

問二

——線部②「だんだん少なくなっていく」とありますが、筆者は日本人のどのような性格がその原因となっていると考えていますか。その日本人の性格を、文中のことばを用いて、十字前後で答えなさい。（句読点はいりません。）

問三

——線部③「本家のヨーロッパ」とありますが、「本家のヨーロッパ」での屋根について説明した次の文の□にあてはまることばを文中からぬき出しなさい。

フラット（水平）の屋根は□^ア□□（三字）が悪く、□□^イ（二字）した際の修理も大変だ。だからヨーロッパの人々は、

へやの□□^ウ（二字）になり、物置として活用できる□□^エ□□（三字）もある、□□^オ□□（三字）のしない

□□^カ□□□□（六字）屋根を採用している。

問四

——線部④「根本的なまちがい」とはどのようなまちがいを説明した次の文の□^ア□^イ□^ウ□^エ□^オ□^カ□^キ□^ク□^ケ□^コ（六字）屋根を採用している。

屋根は□^ア□^イ□^ウ□^エ□^オ□^カ□^キ□^ク□^ケ□^コ（六字）屋根を採用している。

え方。

問五

——線部⑤「『近代的』」のここでの意味として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 幾何学構成の
- イ 国際的な
- ウ 鉄筋コンクリートを用いた
- エ 経済的な

問六

——線部⑥「一大革命」とは、どのようなことですか。文中のことばを用いて、三十字前後で答えなさい。

問七

——線部⑦「インターナショナル・スタイル」とありますが、その内容として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア どの国でも容易に入手でき、形も自由自在に変化させることのできる材料を用いた建物のスタイル。
- イ 自由自在に形を変えることが可能な人工石を用いて、単純な幾何学的構成をとることとなった建物のスタイル。
- ウ 古くさい装飾性はすべて取りはらい、材料を節約することで幾何学的構成をとることとなった建物のスタイル。
- エ どの国でも容易に入手できる材料を使い、それらを節約することで経済性を追求した建物のスタイル。

問八

——線部⑧「世界の一面をしかみない、皮相的なものにすぎない」とはどういうことですか、自分のことばで考えて答えなさい。

問九 本文の筆者の主張として最も適当なものを、次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア フラット（水平）の屋根は、建築学上問題が多い。これからは、現代のヨーロッパやアメリカに見習って、傾斜のついた屋根を、日本人も採用すべきだ。
- イ 構造の経済性と、忠実な幾何学構成を用いた「インターナショナル・スタイル」はもう古いので、新しい近代的な屋根を、日本人は採用すべきだ。
- ウ 世界の流行を表面的に見るのではなく、その本質を理解して、自分たち日本人に最も適した建築を目指していくべきだ。
- エ 新しいものが常に正しいとは考えずに、その問題点をしっかり見極め、日本の伝統の素晴らしさを理解して建築にも活かしていくべきだ。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

竜夫は、いまはまだぬかるみに近い田圃^{たんぼ}を見て、ふと父の言葉を頭に思い浮かべた。言葉を失った重竜は、いつか竜夫の問いに対して、
「……いね^{※1}」

と必死につぶやいたことがある。あれは〈帰れ〉ではなく螢の出現する時期を教える言葉だったのかも知れないと思った。稲を植える直前が螢の季節であった。〈稲〉と父は言おうとしたのだろうか。竜夫はそのときの父の泣き顔と自分にむしゃぶりついてきた恐ろしい動きを思った。だが、それがはたして〈稲〉であったかどうかは竜夫にはもうわからなかった。

「ちよつと、くたびれたねえ……」

千代の言葉でみんな歩みを止めた。四人はすでに相当の距離を歩いていた。竜夫もずっと自転車を押しつつづけて、横腹のあたりがだるかった。ちよつと一服じゃアと言って銀蔵は道端の石に坐り込んだ。

「こんなに歩いたのは何年ぶりかのお、なんか、この世での歩き納め^{しほ}つちゆう気がせんでもないがや」
日灼^{ひや}けた銀蔵の顔の皺^{しわ}は、表情が変わるたびに音をたてて動くかようであった。

「これしきで音はあげられんちゃ。わしは螢が出よるまで一晩中でも歩く覚悟よ」

「私も歩くちゃ」

と英子^bが相槌^{あいづち}を打つと、

①「みんなもつと喋^{しゃべ}られエ、なんか葬式の行列みたいじゃ」

銀蔵はそう怒鳴^{あざな}った。四人の笑い声で、畦道^{あぜみち}を歩いていく農家の人たちが振り返った。

②「もうくたびれてしもうて声も出んがや」

千代は本心からそうつぶやいた。これまでの長い疲れが、歩くたびに体の芯^{しん}から絞り出されてくるような心持ちであった。

「螢、ほんとに出るがやろか？」

楽しそうに銀蔵に問いかけている英子のすっかり娘らしくなった胸や腰を見ると、千代はそこに何かしら恐ろしいものを嗅^かぐような

気がして目をそらしてしまった。

もう少し行くと小さな森の中に入るといふ銀蔵の言葉で、四人は立ちあがった。そこで食事をすることに決まった。

銀蔵が夕陽を指差した。

「おう、……暮れてきたのお」

陽は一気に落ちていった。暗雲と黄金色の光源が^{※2}だんだんにまろび合いながら、一種壮絶な赤色を生みだしていた。広大な空には点々と炎が炸裂^{ざくれつ}していたが、それは残り火が放つぎりぎりの赤、滅んでいくものの持つ一種狂おしいほどの赤であった。

「螢、ほんとに出るがやるか？」

と英子がまた銀蔵に訊いた。

「わしの勘に狂いはないがや。きつと一生に一遍の日になるちゃ」

それからまた相当な道のりを歩いた。銀蔵の言葉どおり、いたち川は左に曲がりながら、木々の繁茂の中を抜けていた。そこから向こうを眺めると、道は極端に細くなっている。自転車を押して歩ける幅ではなかった。竜夫はそこに自転車を置いていくことにした。

日が暮れてしまうと風が冷たかった。木々の下はもうまったくの闇であった。草叢^{くさむら}にビニールを敷いて、四人は足を投げだした。銀蔵が木の枝に懐中電灯をぶら下げた。虫の鳴き声とせせらぎの音が地鳴りのように高まっている。遠い人家の灯が水田の中に点在していて、それらはよく見るところもち低地で光っている。知らぬまに道はほつていたのである。川のほとりの道はそこから土手のように伸びているのであった。深い草叢が細道を包み込んでいた。

「もうどこらへんまで来たがやるか？」

という英子の問いに、

「大泉を過ぎて、もうだいぶ歩いたから……」

体をまさぐりながら銀蔵は何かをさがしていた。

「しもった。時計を忘れて来たちゃ」

英子も千代も時計を持ってこなかった。もちろん竜夫もであった。

「来た道をまた歩いて帰ることになるから、早いこと引き返さんと……」

千代が言った。英子をちゃんと家まで送り届けなければならぬと彼女は思っていた。いまから引き返したとしても、九時を廻るに違いない。

「なァん、遅うなつてもかまわんちゃ。……まだ螢の生まれよるところまで来とらんのに」

英子は不満そうに前髪をつまんだ。

「生まれよるところでないがや。あっちこっちから集まってきたて、交尾しよるところやが」

銀蔵は体から甘い酒の匂いを漂わせていた。

「千歩、歩こう」

とそれまで一度も口をきかなかった竜夫が言った。

「千歩行つて螢が出なんたら、あきらめて帰るちゃ」

「千五百歩目に出たらどうするがや」

と英子がなさけなさそうに答えたのでみんな笑った。

「よし千五百歩まで歩くちゃ。それで出なんたらあきらめるがや。それに決めたぞ」

梟^{ふくろう}の声が頭上から聞こえた。千代の心にその瞬間ある考えが浮かんだ。人里離れた夜道をここからさらに千五百歩進んで、もし螢が出なかつたら、引き返そう。そして自分もまた富山に残り、賄い^{まかな}婦をして息子を育てていこう。だがもし螢の大群に遭遇したら、そのときは喜三郎の言うように大阪へ行こう。

立ちあがった千代の膝^{ひざ}がかすかに震えた。千代とて、絢爛^{けんらん}たる螢の乱舞を一度は見てみたかった。出逢^{であ}うかどうか知らぬ一生に一遍の光景に、千代はこれからの行末を賭けたのであった。

また梟が鳴いた。四人が歩き出すと、虫の声がびたつとやみ、その深い静じやくの上に蒼い月が輝いた。そして再び虫たちの声が地の底からうねってきた。

道はさらにのぼり、田に敷かれた水がはるか足下で月光を弾^{はじ}いている。川の音も遠くなり懐中電灯に照らされた部分と人家の灯以外、何

も見えなかった。

せせらぎの響きが左側からだんだん近づいてきて、それにそって道も左手に曲がっていた。その道を曲がりきり、月光が弾け散る川面を眼下に見た瞬間、四人は声もたてずその場に金縛りになった。^⑥まだ五百歩も歩いていなかった。何万何十万もの蛍火が、川のふちで静かにうねっていた。そしてそれは、四人がそれぞれの心に描いていた華麗なおとぎ絵ではなかったのである。

⑦ 蛍の大量は、滝壺の底に寂寞と舞う微生物の屍のように、はかりしれない沈黙と死臭を孕んで光の澱と化し、天空へ天空へと光彩をばかしながら冷たい火の粉状になって舞いあがっていた。

四人はただ立ちつくしていた。長いあいだ、そうしていた。

やがて銀蔵が静かにつぶやいた。

「どんなもんじゃ、見事に当たったぞオ……」

⑧ 「ほんとに、……凄いいねエ」

千代も無意識にそう言った。そして、嘘でなかったねエと言いながら、草の上に腰をおろした。夜露に濡れることなど眼中になかった。嘘ではなかった、千代は心からそう思った。この切ない、哀しいばかりに蒼く瞬いている光の塊に魂を注いでいると、これまでのことがすべて嘘ではなかった、そのときそのとき、何もかも嘘ではなかったと思いなされてくるのである。彼女は膝頭に自分の顔をのせて身を屈めた。全身が冷えきっていた。

「おったねエ……」

耳元にささやきかけてくる英子の息が、竜夫の中に沁みとおってきた。

「……交尾しとるがや。また次の蛍を生みよるがや」

銀蔵の口調は熱にうかされているように、心なしか喘いでいた。

「傍まで降りて行こうか？」

と竜夫が言った。

「なん、いやや」

英子は竜夫のベルトをつかんで引き留めた。

「ここから見るだけでええがや」

(宮本輝『蛍川』による)

※1 いね……………竜夫の父、重竜の死の間際の言葉。古い言葉や方言で「去れ」と言う意味でとらえていたが、ここではそうではない意味であったかもしれないと竜夫は思い始めている。

※2 だんだら……………いくつかの色の横じまが段になって表されていること。また、そのような模様。

※3 まろび合う……………互いに転がり寄る。ここでは比喩的に用いられている。

※4 寂寞……………ものさびしいさま。

※5 澱……………液体の底に沈んだかす。

問一

——線部 a 「音はあげられん」、b 「相槌を打つ」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

a 「音はあげられん」

- | | |
|---|-----------|
| ア | 大きな音は出せない |
| イ | 弱音ははけない |
| ウ | 助けは呼べない |
| エ | いい音は出せない |

